インドネシア東部の巨石記念物と甕棺墓について

重　松　和　男

筆者は昭和53年度南山大学特別研究費Aの配分を得て，53年8月1日～9月4日の間，インドネシア東部のバリ，スラウェシ，スンバの三島において先史遺跡，博物館及び現在も構築されている巨石記念物の存在する村々を訪問する機会を持った。オランダやインドネシア等の学者による成果と筆者の知見を合わせてここに報告したい。

§1. バ　リ　島

(a) バリ島において従来から巨石墓の範疇に入れて考えられているものに刳り抜き式の石棺墓がある。これ等は既に1920年代より知られており(注1)石棺はデンパサールの博物館やギアンヤールのブドウル Bedulu 村の博物館 Geduang Arca Lembaca Purbakala dan Peninggallan Nasional に多数所蔵され観察することが出来た。スタバによれば(注2)，発見数は73に及び分布は中部バリに多いが，偶然の発見が大多数を占め，組織的な調査や報告のあるものは僅かである。凝灰岩の類の軟質の石を刳り抜いて棺身及び蓋を作るが，両者は通常では同型であり，主として短辺に突起（とって）を各1，2個もっている。ヘーケレンは1955に当時までの発見例を整理研究しているが(注3)，それによると，形態としては大小二種があり，小型のものは0.9～1.2mの長さでペタン Petang やブスンビジュ Busungbiju 等の発見例から屈葬と考えられ，大型では2mを越し伸展葬が可能であり，テガララン Tegallalang付近にのみ発見されていること，更にブラタン Bratan 湖付近からは2ケ1組で長さ1m位の多数の石桶がストゥットゥルハイム(注4)によって報告されていて，突起はないが石棺の可能性があることを指摘している。副葬品の発見例は多くないが青銅製の装身具やシャベル等や紅玉髄やガラスの小玉がある。一方，ノンガン Nongen は鉄器が，ペタン Petang では石斧が存在することが注意される。土器はノンガンで無文土器が棺外から発見されているが共伴関係は不確実である。ヘーケレンはこれ等の事実及びペジャン Pedjen 型の銅鼓の鋳型が石棺も出土しているマヌアバ Manuaba で発見されていることからドンソン文化との関連を指摘している。銅鼓自体，地方的型式であってその年代は明らかでないが，これ等の石棺墓が初期金属器文化に属し，ヒンズー文化に先行することは間違いないであろう。

注目すべきは石棺の形態であって，平面形は長方形であるが，縦横とも断面は下部に向って細くなっていて舟型を呈するものが多いことである。風葬で著名なバトゥール Batur 湖のトルニャン Trunyan 村などで見られる丸木舟のカヌーはやはり短辺に突起を有してあり，長さも比較的短いことから高さは異なるものの類似の形と言い得るであろう。石棺墓は密集せず，間

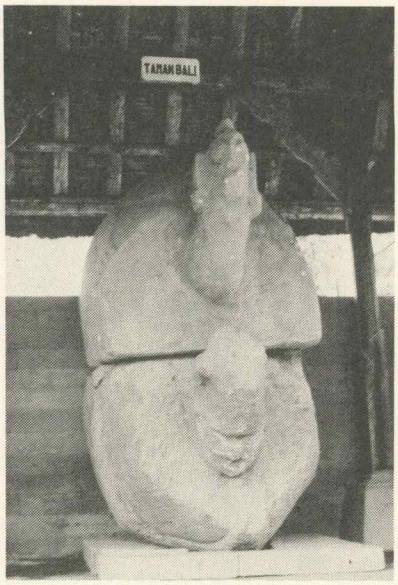

図1.　タバンバリの石棺

隔をおいて発見されることが多いことから考えると，一部の有力者のみの墓葬であった可能性が強く，一般の人々は舟型の木棺を，時には2つ上下に合わせて用いたことを推測しても無理ではあるまい。第二に突起の内には人頭形をなすビンタンクニン Bintangkuning やベン Bheng，メラヤン Melayang のもの，顔を陰刻したもの，棺の蓋に覆いかぶさるように手足が彫り出され，亀の首のように人頭が付けられたタマンバリ Tamanbali のものなどが存在することはインドネシアの他の地域の巨石記念物との関連を強調しうるものと言えよう。

筆者はこれ等石棺墓の遺跡の踏査を希望し，博物館に隣接する考古局分室 Kantor Suaka Sejarah dan Purbakala を訪れたが先史の担当者が不在で充分な情報が得られず，僅かにブドウル村のテンガ Tengah の石棺と，ブルアン Buruan 村のチェルク Celuk の3ヶ所の石棺出土地点を同所の I Gusti Patu Tjeuik 氏の案内で尋ね得たのみであった。二遺跡とも平地の集落内にあり，後者は北側に川が流れる台地の縁辺にあった。スタバ氏の調査したタマンバリ及びブヌテイン Bunutin の例も同様の立地である(注5)。なおスヨノ等の調査したバリ島西端部のギリマヌク Gilimanuk の遺跡は(注6)一次葬・二次葬，甕棺葬（2例）があるが槍先などの鉄製品，青銅のシャベルや斧，ガラス小玉，叩き目文の土器などが出土しており，ほぼ同じ時代と考えられることから両者の関係の解明は今後の重要な課題と言えよう。

(b)　クルンクンに近いゲルゲル Gelgel の村には2枚の石を水平に立てて配置した座席状のもの，中央に孔を半ば明けた石臼（Mortar）石桶（Trough），多数の浅い小さい窪みを穿った Batu dakon などがあって，巨石記念物の類として取り扱われている。ストゥットゥルハイムも(注7)報告しているが，最近ではスタバ夫人が研究を行っており，その御教示を得て幾つかを訪問することが出来た。村のペナタラン寺院の付近に集中して存在する。座席状のものは6つ並んだものもあり(図2)，石桶は長さ約1 m巾 50 cm，石臼は径 60 cm位の上面の平らなものや，Batu dakon などを実見できた。なおスタバ夫人は寺院内の高さ1 mの石製人像も巨石の範疇に入れて考えている。石臼は現用のものと同形で巨石

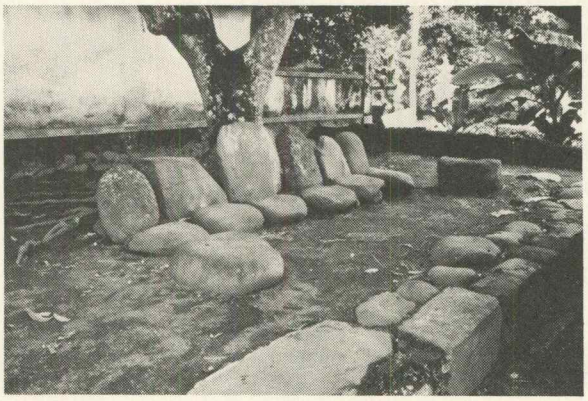

図2.　ゲルゲル

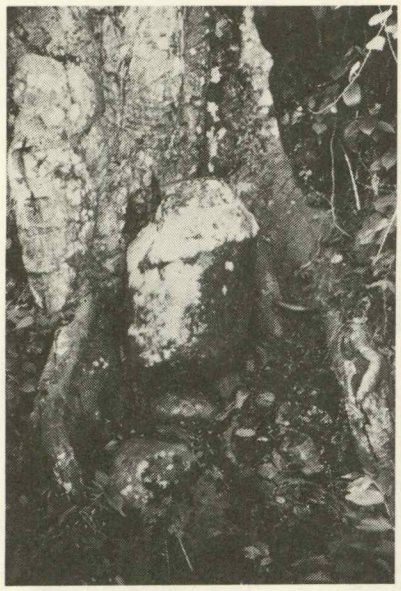

図3．テガナンの立石

記念物とするには疑問が多い。多数の学者によりインドネシアの各地から報告されているがスラウエシでも後述の人像や石甕とは共存しない。石桶は石棺の可能性も存在するが，現用の豚のえさ入れも石製があり，その判別は困難である。Batu dakon も各地で報告されているが用途等は不明である。スンバ島でも墓に混じて少数見受けられたが踏み石になっていたものもある。同島ではやはり豚のえさ入れと石棺とも地山の岩を掘って作っており，石桶や Batu dakon を巨石記念物とすべきか否かは難しい，時代も新しいと考えられる。但しゲルゲルのこれ等のものが極く最近のものでないことは明らかである。

(c) バリアガ Baliaga の村テンガナン Tenganan には巨石記念物に類するものが多いと言われて(注8)いるが，石積みのテラスなどや村の石畳なども含めて巨石文化の残存と考えられることが多く疑問がある。村の北側裏山には此地の馬の伝説と結びついた巨石があり，マンク Mangku Widia 氏の案内で幾つかを見ることが出来た。Taikik（馬糞），Rambut Pule（たてがみ），山頂の Batujaran（馬全体）は全て自然石で，巨石崇拝ではあっても記念物とは言えないが Kaki Dukun（馬のファロス）はファロス形をした高さ1m位の立石（図3）で子授けの神として棒げ物もあり，人工を加えた可能性もある。

(d) テンガナンやトルニヤン，北部のセンビラン Sembiran 等のヒンズー以前の慣習を残すバリアガの村には元来内部に寺院建造物などを持たなかったとされる，石積みでテラス状の聖域があり，立石等の巨石を有するものが知られている。トルニャンでは二つの大石が並んで存在する例を実見できたが，センビランでは村長が不在で案内をしてもらえなかった。同村についてはスタバが17例について詳細に記している(注9)。これ等も巨石記念物としては疑問があるが，インドネシア各地に遺構があってヒンズー以前と考えられており，オセアニアのマラエ等との関連から古くより注意されてきたものである。

以上の如くバリ島には初期金属器時代の石棺墓，ゲルゲルなどの時代・性格不明の幾つかのもの，テラス状の巨石を有する聖域，自然の巨石と伝説の結びついたものの4種があり，時には村の石畳や住居の基壇まで含めて巨石伝統として考えられることも多いが，その所属年代，特にその起源の年代について，今後充分な検討が必要であろう。

§2. スラウエシ島

(a) 先史時代かと考えられる巨石記念物としては中央スラウエンのパル Palu の南の，パル，タワエリア，コロなどの川の流域に存在する石人像や石甕が最も著名である。20世紀初頭より

知られ，カウデルン(注10)，クルイト(注11)，ラーベン(注12)等によって報告されているが組織的な発掘調査は行われていない。筆者は此地を訪れる希望をもっていたが，充分な情報と時間が得られず今回は断念せざるを得なかったが文献から若干の紹介を行いたい。(i)石人像　これは単石の人像で高さは1mから4.5mに及ぶ巨石立像でナプ Napoe 11，バダ Bada 15，ベホア Behoa 5など30を越す発見例があるが群在はしない。頭部と胴部は明らかであるが脚は作り出されず，全般に素朴な造りで顔には口を表現しない例が多い。性徴を明らかにし，男性の場合，両手をそえたスタイルが通例である（図4）。女性像はボンバ Bomba 等にあるが数は少ない。目は円形のものと細長いものの2種がある。なおナプのものは他処とやや異なった特徴をもっている。(ii)石甕　主として高さ，口径が150cmを越える巨大な石甕でラオスのチャンニン Tranin 高原のバン・アン Ban Ang(注13)等のものと類例している。蓋も全例ではないが発見されている。内部は刳り抜いて造り，内に隔壁などを造り出す例もある。顔面などの彫刻が施された例があり，石人の顔と類似する。石人像や後述の甕棺と共存することから三者は一連のものと考えられる。なお，類例は北スマトラのトバ湖などにもある。(iii)石臼　上面の平らな石に，1個以上の孔を有するもので，縁や孔間の仕切りを造り出すものもある。多数の発見例がある。(iv)その他にカンテウ Kantewoe などでメンヒル Menhir が，ベホアなどでドルメンが存在し，人像などを彫刻した石や，バリの Batu Dakon と同様なものも存在する。

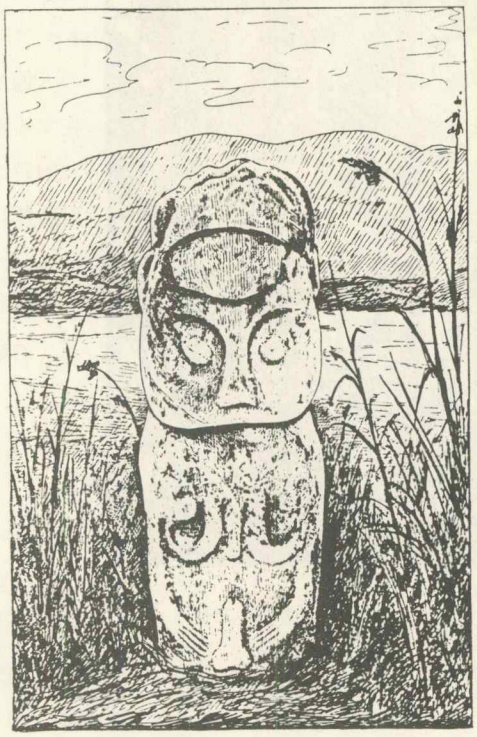

図4．ベホアの石人像

石甕は明らかに埋葬に関連するものでラーベンは灰を見出しており，火葬あるいは二次葬の可能性が強い。石甕は群在するが，石人像は異なり，石甕や甕棺を有する墓地のシンボルとして或いは守護のためにあったものではないかと考えられる。ドルメンや彫刻のある石は或いは同じ文化に属するかと推測できるが，メンヒルは不明で，石臼はこれ等と共存しないことからも別種の遺物であろう。これ等も所属年代は明らかではないが，他島の巨石記念物からみて石臼などを除き初期金属器文化の所産であろうと考えられる。

(b)　南セレベスのタナ・トラジャ Tana Tradjaのランテパオ Rantepao の周辺には現在まで造られている多数のメンヒル群が存在する。一般に高さ2m～4m位で先細の造りである。筆者はランテパオの東のマランテ Marante 村の東，南のカラシック Karassik、南のロンダ

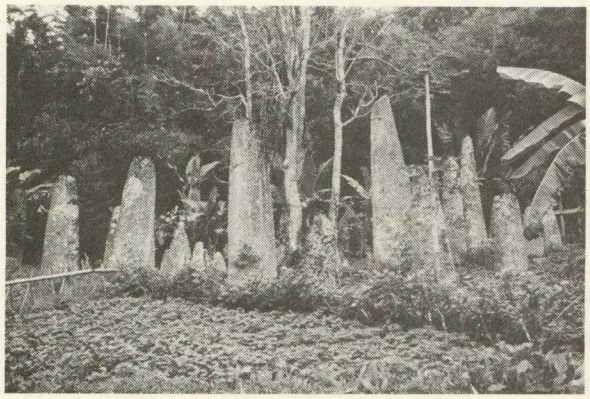

図5．ボリのメンヒル群

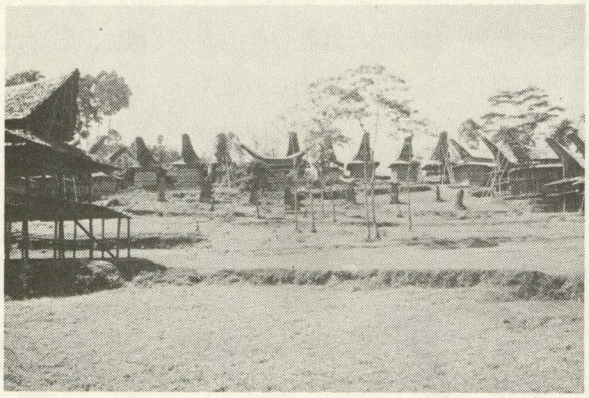

図6．カラシックのメンヒル群

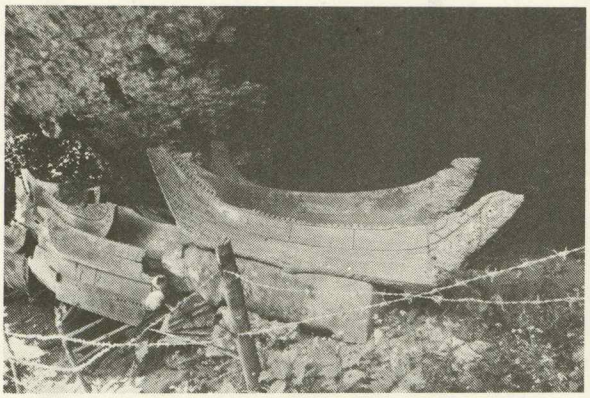

図7．ケテの木棺

Londa，北のパラワ Palawa 村付近，北東のロコマタ Lokomata，北のボリ Bori（図5）等でこれを実見することが出来た。ロコマタの如くストーン・サークル状をなすものもあるが，主として列石 alignment を形成する。必ずしも整然とした列をなさず倒れている立石も多い。ロンダの如くごく僅かな数しか見当らない例もあるが，20以上の立石を持つ例が多い。これ等は墓地は別にあって墓標ではないが死んだ有力者の記念物として葬儀の場所に建てられる。カラシックでは9月に大葬儀があるとのことでメンヒル群を取り囲むように葬儀の参加者を入れる小屋を準備中であった（図6）。小屋は木材を用いず竹を組んだ構造で壁面が網代状のものであることを除けば伝統的な家屋と同様の外観を呈し，屋根は竹でふき，外面には彩色を施していた。他の例も村の家屋とは別の地点で周辺に空地を残し葬儀の場であることを示していた。しかし，マランテやランテアロ Ranteallo，パラワ等の村で見た葬儀は村の中央広場で行われ，住居とその反対側にならぶ穀倉の高床の下や建物の中間に小屋がけなどして参加者の場を設けていた。立石に対して一頭ずつの水牛を犠牲にすると言われ，水牛の数によって示される死者の社会的地位によって葬儀を行う場に差があるらしい。カラシックでは100頭からの水牛が殺されるとの話であった。墓との位置関係はロコマタの如く，すぐ裏手に墓がある近接した例もあるが一様ではなく，此地の住民が崖の面に墓を設けることに起因しよう。墓は崖面に洞穴をうがったり，自然の洞穴や岩のすきまや岩陰を利用したり，岩面に木材を打ちこんだ上に棺を載せるなどの方法をとっている。木棺を用い，

棺身が刳り抜いた舟の形のもの，蓋が舟をかたどったもの（図7）など，此地の家屋や舟形の臼と同様，舟との結びつきが強い。水牛の頭部などを造り出す例もある。家族墓的要素が強く，破損した棺でみると何体分も骨が見受けられ，二次葬あるいは改葬を行っていると考えられる。墓には人像を置くことも多いが死者に似せるわけではないとのことである。なおメンヒルを運搬する際には竹で梱包するとの話で，恐らく引く際の摩擦を柔げる工夫であろう。これ等のメンヒルの起源が年代的にどこまでさかのぼり得るか，同様に儀牲の水牛をつなぐ木や木柱との関係，中央セレベスの巨石記念物との関連等は今後の問題であろう。

(c) 甕棺　筆者は南スラウェシのマロスの東，ランテムルンに近いタプアン洞窟遺跡 Leang Tapuang を総領事館の佐久間氏の案内で見学した。付近は細石器文化であるトアリアン Toalianの洞穴の多い石灰岩の地帯である。壁に手を当てて上から顔料を塗布したものが多数残っており，多くの石片 flake や人骨片が散在した他，土器片も多数認められた。（図8）にそのスケッチを示すが，カルムパン Kalumpang(注14)と類似した刻線と点による文様で，器形は大形の甕で口径は推定30㎝ほどである。人骨の存在から甕棺と考えられるが，トアリアンの洞穴に土器が出土することは知られているが別の後代の文化として無視され殆ど報告されていない。案内の老人の話では洞穴の南方の平地からも人骨とともに大甕が発見されるとのことで，

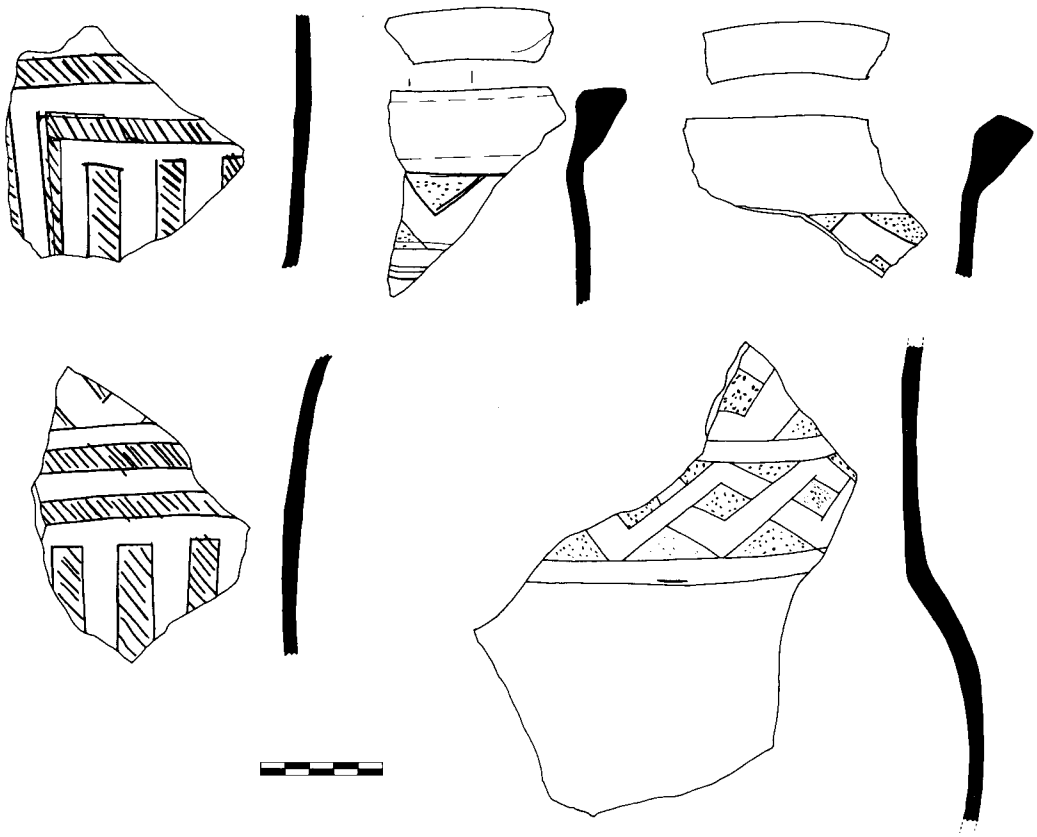

図8.

トアリアン以降の此地の文化の継起を知りうる有望な地点かと考えられる。中央スラウェシではカウデルン(注15)やクルイトがナプやバダ等で石甕の近くで発見しており，石人・石甕と一つの文化に属する可能性が強い。さらにボネ湾のパロポ Palopo の北のサバン Sa'bang ではヴィレムス(注16)が甕棺を発掘調査している。石蓋を有するものなどがあるが，人骨や副葬品は発見されなかったが群在することから甕棺であることは確実である。いずれの甕棺も年代等については全く不明である。寸法からみて両者とも二次葬用の可能性が強い。

以上がスラウェシでの主要な巨石記念物と甕棺の概要であるが，中央スラウェシでの巨石記念物と甕棺の共存は両者の関係を解明するための重要な手掛りとなろう。また現在も建造されているメンヒル群とこれ等の関係も今後の追求の対象として取り組んでゆきたい。

§3. スンバ島

(a) 此地には現在も造られている巨石墓としてドルメン状の墓が存在する。巨石運搬用の木そりが現在も使用されていることも有名である。筆者は東スンバのクインガプー Waingapu, メロロ Melolo, 西スンバのワイカブバ Waikabubak の周辺で実見することが出来た。

（i） ワインガプー付近では東のプルレウ村 Pruleu，パリンディ村 Palindi, カワンゴ Kawango 等の村落内で多数の巨石墓を観察した。大墓は4本の石柱の上に大きな平石を置くもので人像を上に載せるものもある。小・中の墓は単に大石を地上に置いたもの，その周囲に石を配したもの，碁盤状ドルメンに類するものなどがある。カワンゴには王の墓と称される2基の大墓がある。これは四本柱の上の天井石を穿って埋葬部を作り更に石蓋をしている。脚の内部には奴隷などを葬るとのことであった。石材は18 kmほど離れた山から3ヶ月かかって運搬したもので1870年頃の建造とのことであった。パリンディでは天理参考館が特注して作らせた木そりを見ることが出来たが，木そりで運搬した後，天井石はてこを用いて井楼組に木材を積み重ねて次第に持ち上げ，更にその上の蓋石はやし材を天井石に斜めに渡した上を引き上げ，土盛りは行われないとのことである。 （ii） ムロロ付近ではレンデ Lende 及びウマバラ Umabala の巨石墓を観察した。前者では地震で崩壊したものが多く，四本柱のみの構造的な弱さを示していた。天井石に牛頭などを付けたもの，人像をのせた大墓の他，蓋石を地上に置いたのみの小墓には四角形の他，円形に加工したものもあった。四角と円の差については村人は特に意味はないと述べているが疑問が残る。ウマバラでは天井石を運搬した木そりが石をのせたまま朽ちかけていた。別の儀式を行わなければ運搬しても構築できないとのことで，葬儀及び墓の築造に長い年月を要し，その間遺骸を住居内に安置しておくこと等は考古学の研究者が墓の年代或いは一次葬，二次葬の問題等を考える際の要注意事項であろう。なお本学の倉田勇教授によればムロロ付近のサブ人の村では床下埋葬の根跡があるとのことで興味深かったが，時間等の問題で訪ねることは出来なかった。 （iii） 西スンバではクイカブバ付近のタルン Tarung, ジャガンガル Jagangaru, タロナ Tarona, レテカワイナ Letekawaina, ボンドマロト Bondomaroto, パイリジン Pairijing, パライカテキ Paraikateki の村々と，バスで半時

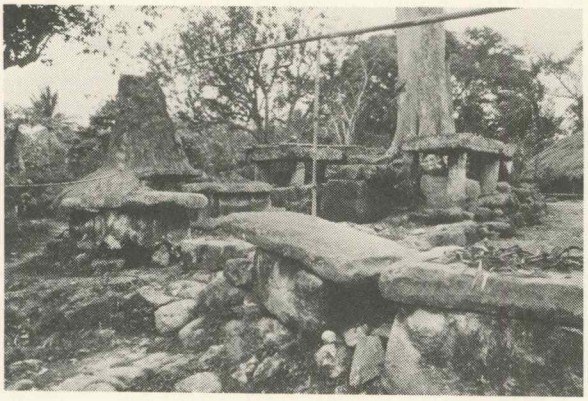

図9．西スンバのドルメン

間程東のパスンガの墓を見ることが出来た。パスンガでは縦2列に並らぶ住居の中央に多数のドルメン状の墓がある他，やや離れて精細な彫刻を施し，人像を持つ大墓が存在した。この村以外は村は小さな岩山の上に作られ，首狩りの風習から防禦的性格が強かったらしい。村の中央部は墓で覆いつくられていると言っても過言ではなく，広場は殆どない。従って墓も構築する空地が無くなったためか，村の麓の平地にも多数存在する。作りも平地のものが新しいようで，蓋石に牛の頭部を彫り出したものなどは主として平地に存在した。此地方では大谷石のような軟質の石材が産出するため，埋葬主体が刳り抜き式の石棺で，別種の大石を蓋としてドルメン状に構築した中型の墓が大多数を占める(図9)。パスンガでは蓋石が棺の上部からはみ出さないもの，棺にはめ込んだ例も存在した。大墓は中墓に重ねて四本柱の上に天井石を載せた構成で，四本柱のドルメンは墓を覆うための構造物であることを示している。人像等をもつ例も小数だが存在した。その他，箱式石棺の上に蓋石を置いた形や，村の基盤が岩山のため，地山を穿って棺状にしたのもあり，後者では棺壁の部分が地上にかなり高さを持つ例も存在した。

バリやスラウェシとは異なり，舟と結びつく要素は少ないが，蓋石が亀甲形を呈するものも多く，その一端に牛の頭を造り出したりすることは無関係でないかも知れない。なお，これ等の飾りや人像等は短辺の先端にあり，加工の秀れたものは明らかに前後を区別していると考えられる。小墓でも置石を囲む石の内，前後に当ると考えられる部分の石をより大きな石としている例がパリンディで見受けられた。なお長軸方向は主として南北を指すことが多いようであり，墓地内ではほぼ一定であるが，反対方向のものも混じている。墓地が居住区の中央やすぐ近くに作られていること，殉葬の風習があったらしいことは興味深い。

(b) 東スンバのムロロには甕棺墓地があり1920年代より多くの学者より調査され，1939年にはヴィレムズが組織的な発掘を行ったが未報告である。ヘーケレン(注17)が日誌等からまとめているが，甕の高さは70～20㎝位で波形などの刻文をもつものもある。土器等の蓋を有し，長頸の壺を逆倒立させて蓋とした例は注目される。人骨は二次葬で合葬例もある。甕の頸部が細いものでは甕を割って頭蓋等を納めたと考えられている。貝や石製小玉の他，方角石斧が副葬品として存在する。特に刻文を白色教料で埋めた人面付の長頸壺は特徴的で1例ではあるが，刻文ではなく人像（トルソ）を付したものもある。時代は初期金属器時代と考てられている。筆者も住民が掘った穴の断面に露呈していたものにより頸部に比し中に入った頭蓋骨が大きいこと，蓋あるいに副葬の土器が伴うことを観察できた。文献には無いが人面付の壺の写真などからス

ンバ島の他の地にも甕棺は分布すると考えられる。

§4. 結　　び

以上インドネシア東部の3島の巨石記念物等について述べてきたが，フロレス島などにも存在することは良く知られており，再度これらの地を訪れて調査したいと考えている。

全般的には，インドネシアの巨石記念物にはニアスやスマトラのトバ湖(注18)のものなども含めて，人像を墓に付ける傾向が強く感じられる。スマトラのパセマ高原(注19)やジャワのパカウマン(注20)等のものと一連の伝統に属するのであろう。次に舟との関連についても同様の事が言えよう。これは単に墓だけでなく家屋や臼などについても同じであることはスラウエシのみならずトバ湖などでも明らかである。第三に板石を組み合わせた箱式石棺もパセマやジャワのワノサリ Wanosari(注21)などに例があるものの，刳り抜き式の石棺あるいは石甕が主であることが指摘できる。特に新しいものにその傾向が強い。更に木製の棺等との関係も無視できないことはバリ島の項で述べたが，他の地でも同様である。直接に現在の住民と結びつかない巨石記念物は古く考えられがちであるが，民族の移動等の可能性を考えると中部スラウエシの巨石記念物などはどこまで実年代が遡ぼり得るか疑問がある。初期金属器文化，恐らくは鉄器の存在が，石の加工等から推測されるが，この種の文化がインドネシアの各地で比較的長い年代に亘って継続したことは所謂未開民族の存在から明らかである。逆に現在も構築されているタイプの巨石記念物についてもその初現はかなり遡る可能性がある。新旧両種の巨石記念物の実年代は隔絶したものと考える必要は無いと言えよう。更にこれ等を産み出した社会の文化は実年代は異なっても内容的に相等しいものを持っていたとも考えられる。先史時代のものを新しいタイプから単純に類推することは危険であるが，両者の関係については筆者の今後の課題としたいと考えている。

甕棺については鹿野忠雄(注22)がその重要性を指摘したフィリピン方面との関連や中国陶磁の骨壺との関連，更に巨石墓等の墓葬との異同について今後注意を払う必要があろう。前述のほか，インドネシアでは西ジャワのアンヤール Anjar(注23)やサライエル島，南スマトラ等にも例があるが，調査例は余りに少なく今後の大きな課題として残されている。

註

(1) Heekeren 1955.
(2) Sutaba 1974.
(3) Heekeren 1955.
(4) Stutterheim 1935.
(5) Sutaba 1974.
(6) Soejono 1963.
(7) Stutterheim 1935.
(8) Soejono 1963.

(9) Sutaba 1976.
(10) Kaudern 1938.
(11) Kruit 1938.
(12) Raven 1926
(13) Colani 1935.
(14) Stein Callenfels 1952.
(15) Kaudern 1938.
(16) Willems 1940.
(17) Heekeren 1956 b.
(18) Schnitger 1939.
(19) Hoop 1932.
(20) Heekeren 1958.
(21) Hoop 1935.
(22) 鹿野忠雄 1945.
(23) Heekeren 1956 a.

Bibliography

Colani, M. 1935 : Mégalithes du Haut-Laos.
P. E. F. E. O. XXV, XXVI Paris.

Heekeren, H. R. van 1955 : Proto-Historic Sarcophagi on Bali.
Berita Dinas Purbakala No. 2

1956 a : Note on a Proto-Historic Urn-burial Site at Anjar, Java.
Anthropos 51 pp. 194-200

1956 b : The Urn Cemetery at Melolo, East Sumba.
Berita Dinas Purbakala No. 3

1958 : The Bronze-Iron Age of Indonesia. 'S—Gravenhage.
p. 48, pl. 19

Hoop, A. N. J. Th. à Th. van der 1932 :
Megalithic Remains in South-Sumatra.

1935 : Steenokistgraven in Goeneng Kidoel.
Tijdschrift Bataviaasch Genootschap pp. 83-100

Kaudern, W. 1938 : Megalithic Finds in Central Celebes.
Ethnological Studies in Celebes, V. Göterborg

Kruyt, A. C. 1938 : De West-Toradjas op Midden-Celebes. Amsterdam

Raven, H. C. 1926 : The Stone Images and Vats of Central Celebes.
Natural History, 26- 3 pp. 272-82

Schnitger, F. M. 1939 : Forgotten Kingdoms in Sumatra. Leiden

Soejono, R. P. 1963 : Indonesia (Regional Report)
Asian Perspectives VI pp. 34-43

Stein Callenfels, P. V. van 1952 : Prehistoric sites on the Karama River, West Torajaland, Central Celebes.
Journal of East Asiatic Studies. pp. 82-97

Stutterheim, W. F. 1935 : Oudheidkundige Aanteekeningen
XL Megalithica op Bali.
Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indië 92, pp. 185-186

Sutaba, I Made 1974 : Newly Discoverd Sarcophagi in Bali.
Archarhcipel, 7. pp. 133-138
1976 : Megalithic Traditions in Sembiran, North Bali.
Aspek-aspek Arkeologi Indonesia No. 4
Willems, W. J. A. 1940 : Preliminary report on the excavation of an urn-burial ground at Sa'bang, Central Celebes. Proc. 3 rd Congr. of Prehistorians of the Far East. pp. 207-208.
鹿野忠雄 1945 「インドネシアに於ける甕棺埋葬」東南亜細亜民族学先史学研究 1 巻, pp. 82-112.